



## のいる風景

# 毎床 ソエ子 さん



【まいとこ そえこ さん】 信濃

●若崎流新舞踊「千歳毎床会」会主。会は平成28年12月、惜しまれつつ45年の活動に幕を閉じた。

## 尽きることのない

## 踊りへの情熱

**芸** 歴81年。熊本県で劇団を営む一家に生まれた毎床さんは、3歳から藤間流の日本舞踊を始め、12歳で師範となった。

劇団の一員として、物心がつく前から舞台上で踊り、観客を喜ばせることを考えていた毎床さんは、独学で新舞踊を始める。「新舞踊は、いわば大衆のための踊り。誰が観ても楽しめる踊りを踊りたくて、歌謡曲などに自分で振り付けをして踊るようになった」と話す。九州各地のイベントに呼ばれるほど、毎床さんの踊りは評判になったという。結婚後、昭和37年に夫の転勤で千歳へ来たが、当初は4年ほどで九州に戻る予定だった。

「見知らぬ土地で暮らすことを不安に思ったのは一瞬です。どこにいても私は踊らぬにいられない。千歳に来てすぐ舞踊教室を開きました。そうしたら、生徒を置いてここを離れるわけにはいなくなりました」と笑う。

周囲の勧めもあり、昭和49年に若崎舞邦の名で、若崎流新舞踊「千歳毎床会」を立ち上げた。

「幼少期から、いつか自分で舞踊団を持ちたいと考えていました。でもその夢が、九州から遠く離れた北海道で叶うなんて思いもしませんでしたね」と目を細める。

「会に『千歳』の名を頂いたからには、地元の皆さんのために活動しよう」と、声が掛ければどこへでも踊りに行きました」と話す。チャリティー公演や福祉施設の慰問のほか、市民納涼盆踊り大会などで場を盛り上げ、踊りの楽しさを伝える活動を精力的に行ってきた。たった8人の会員でスタートした会も、20周年を迎える頃には、130人を超えた。

「観客が私の踊りを観て喜んでくれるのが何より嬉しかった」という毎床さんだが、平成25年に長年の酷使で股関節を傷め、舞台上で踊ることが

難しくなっていました。

「あのときは本当にショックでした。私は舞台上で生きてきたようなものですから。でも私の踊りへの情熱は消えなかった。退院後は真っ先に弟子が待つ稽古場へ。椅子に座って稽古をつけました」と明るく笑う。

高齢化の影響は会員にも及び、体調を気にしながらの活動が増えたという。「皆がはつらつと踊れるうちに会を閉じ、有終の美を飾ろう」と会の解散を決める。

平成28年12月「創立45周年感謝の集い」を最後の公演として、毎床さんは3年ぶりの舞台上に立ち、トリを務めた。「涙の花舞台」の歌詞に自身の思いを重ねながら踊ったという。

「会は閉じましたが、これからも若崎流師範としての活動は続けていきます。自分の身体を大切にしながら、後進を育て、一生踊りに関わってきたい」と力強く語った。